

はなかったのだろうか。共産勢力との関係について、ベトナムの宗教研究所発行の研究書では、ミンチョンダオ・ハウザン派が1945年以降、一貫してカオダイ教による民族解放闘争の中核を担ってきたことを強調している [Viện Nghiên Cứu Tôn Giáo 1995: 137-141].

③カオダイ教各派の公認について。カオダイ教の公認化以前は、一宗教一公認団体が原則であった。仏教は大乗から上座部までさまざまな宗派があるにもかかわらず、公認団体は「ベトナム仏教教会」(1981年成立)ひとつのみである。カオダイ教は各派ごとに公認されているが、どういった順番で、どの派を選択して公認したのか国家側の意図を知りたいところである。また本書ではタイニン派を中心に研究されているが、各派で国家との政教関係に違いがないのかも気になるところである。

④扶乱なきカオダイ教の行く末について。筆者は本書におけるカオダイ教の歴史を「徐々に脱魔術化を果たしていく過程」(p. 3)だと捉えている。一方、フィリップ・テラーの編著は、社会主義体制下でありながらも多様性をみせるベトナムの宗教事情を「再魔術化」と評するものであった (p. 40)、と指摘している。「宗教の復興」とは公認宗教制度が整備されていく時期と符合すると筆者は断定するが、それだけではなく、公認化の枠外にある民俗宗教の復興でもあったといえるのではなかろうか。扶乱は社会主義体制下で禁じられる一方、1990年代半ば以降、聖母道信仰や「ホーおじさん教」などにおける「レンドン(憑依)」が「民族文化」と扱われ、是認されるようになった。また扶乱の禁

止は教団のリーダーシップ構造の変化をもたらしたが、ベトナム戦争終結後の海外在住ベトナム人信徒によるディアスポラのカオダイ教ではどうなっているのかも参照したいところである (たとえば [Hoskins 2015])。]

引用文献

- 今井昭夫. 1999. 「社会主義ベトナムにおける宗教と政治—国家公認宗教団体を通して」『Quadrante』1: 184-206.
- GS.TS. Đỗ Quang Hưng. 2014. *Nhà Nước Tôn Giáo Luật Pháp*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Chính Trị Quốc Gia - Sự Thật.
- Hoskins, Janet Alison. 2015. *The Divine Eye and the Diaspora: Vietnamese Syncretism Becomes Transpacific Caodaism*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Phan Đăng Thanh and Trương Thị Hòa. 2013. *Lược Sử Lập Hiến Việt Nam*. T.P.Hồ Chí Minh : Nhà Xuất Bản Tổng Hợp Thành Phố Hồ Chí Minh.
- Viện Nghiên Cứu Tôn Giáo. 1995. *Bước đầu tìm hiểu Đạo Cao Đài*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.

牛久晴香. 『かごバッグの村—ガーナの地場産業と世界とのつながり』昭和堂, 2020年, 320p.

宗野ふもと*

ガーナ共和国アッパーイースト州ボルガタンガ地方では、欧米や日本へ輸出するバスケット生産が盛んである。本書は、筆者がフィールドワーク中に抱いた疑問「ガーナの辺境にある小さな農村が、どのようにして世

* 筑波大学人文社会系

界の市場にひろく流通するようなバスケットの産地になっていったのだろうか」(pp. iii-vi) に答えていく書である。この問いに取り組む中で、ガーナ辺境におけるバスケット生産と、開発援助や国際市場との関わりが明らかにされる。

序章では、アフリカの手工芸と開発援助に関する先行研究がレビューされ、本書の視座が示される。アフリカのかごは、先進諸国の消費動向と貧困問題の解決を目指す開発援助の影響を受け輸出商品化されてきた。一方で、開発援助の現場では、企業や援助機関と現地の人びとの価値観の違いから摩擦や軋轢が起きてきた。本書は、ボルガ・バスケット産業を、企業や援助機関の関与によって生じる諸問題にうまく対応した「成功例」と捉える。そして、価値観の違いから生じる摩擦や軋轢を回避するにあたり、ミドルマン（在村の仲買人）が重要であること、彼らの実践を追うことを本書の中心に据えることを示す。

第一章では、調査地とバスケット産業の概要が示される。ガーナは南北地域で経済格差が存在する。本書の舞台であるボルガタンガ地方は北部に位置する。天然資源や輸出作物を有さないこの地の主要産業は手工芸（バスケット産業）である。筆者が調査を行なったニャリガ村の人びとは、複数の経済活動を行ない生計を維持する。ニャリガ村では、バスケット製作は数ある経済活動のひとつとして位置づけられている。

第二章では、地酒づくりに用いられていた濾し器「ダーム・テア」が、いかに先進諸国に輸出されるバスケットに変容したのかが明

らかにされる。ダーム・テアは、1950年代の地酒の商業化に伴い製作されなくなったが、それと入れ替わるように「テア（バスケットの以前の通称）」の生産が、隣国ブルキナファソの商人の関与で始まった。テアが商品になった背景には、欧米諸国におけるアフリカンアートへの関心の高まりがあった。1980年代には、ガーナ政府や国際開発援助機関の支援を受け、バスケットは輸出商品としてその生産と流通の体制を整備させた。2000年代以降、先進諸国の企業がフェアトレードに参入した。企業は、卸売り企業を介さず産地から直接バスケットを買い取るようになり、産地では、形やデザインの多様化や納期に沿ったバスケット製作が開始された。

第三章では、バスケットの製作技術と、企業が求める水準のバスケットがいかに製作されるのかが明らかになる。バスケット製作は複雑な技術を必要とせず、村では多くの人がバスケットを製作しているために、技術習得の機会が身近にある。参入のしやすさがバスケット製作の特徴である。参入しやすいのに企業が満足する水準のバスケットの生産が維持されるのは、定期的で開催されるバスケット市で編み手が講評し合い、編み手の間で「よいバスケット」をつくるための勘所が共有されるからである。

第四章は、原料に関する章である。バスケットの原料は、ガーナ南部に自生するギネアキビというイネ科の草本である。1980年代に産地に自生していたベチバグラスから、ギネアキビへの原料の転換が生じた。理由は、第一に同時期にバスケットの輸出が増加

したこと、第二にダム建設によりベチバグラスが減少したこと、第三に南部へ移住したボルガタンガの人びとがギネアキビを「発見した」ことによる。南部はガーナの主要な輸出品であるカカオや金の産地で、植民地期以来、ボルガタンガの人びとは南部で短期的・長期的な労働をしてきた。歴史的、経済的に構築されてきた北部から南部への人の流れが「よりよい原料」であるギネアキビの「発見」につながった。

第五章では、人びとがバスケット製作に携わる理由が説明される。バスケット製作で得られる収入だけでは日々の生活は維持できない。それにもかかわらず多くの人がバスケットを製作するのは、第一に製作にかかる初期投資が少ない、第二に複数の販路があり一度バスケットを製作すれば確実に現金を得られる、第三にバスケット製作は換金作物生産や家畜の飼育と比して短い周期で現金を得られるため生活維持に便利な収入源である、第四に時間と場所を選ばずに製作できるからである。重要なのは、バスケット製作においては、技術の習熟を目指すことが絶対的な目的になっていない点である。編み手がバスケット製作への関わり方を選択できる「気まま」な雰囲気、結果として編み手の層を厚くし、産地の発展にもつながっている。

第六章では、バスケット集荷の実態が明らかにされる。編み手は「気まま」に製作するが、バスケットは先進諸国向けの輸出品である。企業はいかに自社の水準を満たすバスケットを集めるのか。ここで中心的な役割を果たすのは仲買人である。仲買人は、第一に

市での買い付け、第二に指定したデザインを不特定の編み手から買い付ける「指定持込」、第三に特定の編み手にデザインと納期を指定し製作を依頼する「コントラクト」という3つの方法を駆使してバスケットを集荷する。第一の取引方法は、仲買人にとって定番商品を大量に仕入れるのに適し、編み手にとって日銭を稼ぐのに都合のよい。第二、第三の取引方法は、仲買人にとっては、企業によるオーダー商品の増加や多様化への対応に適している。編み手にとっては多くの収入を安定的に得られるほか、第二の取引方法には編み手の都合に合わせた製作ができるというメリットもある。

第七章では「コントラクト」の詳細が明らかにされる。コントラクトの不履行は頻繁に生じるが、仲買人は不履行をした編み手を制裁したり排除したりすることはない。むしろ、仲買人は、不履行の発生を前提としてバスケットの不足を埋め合わせるために編み手を増やしたり、いざとなった時に頼れる編み手を確保したり、編み手に対する気遣いや経済的支援を通して編み手の協力を喚起しようとしたりする。仲買人は、年々高まる企業の要求に応えようとする一方で、編み手には自分のペースでバスケットを製作してもらえよう努力を怠らない。これらの行動は、企業と編み手と良好な関係を維持し仲買人の商売を継続させるためのものであり、同時に、企業と編み手の両者が「ほどほどに」満足できる状況を生み出している。

終章では、前章までの内容を再度まとめながら、ガーナの辺境にある小さな農村が、世

界の市場にひろく流通するバスケットの産地になっていったのは、第一に産地が外部からもたらされる変化を受け入れてきたこと、第二に外部からもたらされる新しい要素を、編み手が自らの生活の論理に適合させ価値を見いだしたこと、第三に仲買人により「価値観の断絶」が乗り越えられたからであることが示される。最後に、バスケット産業の事例から、アフリカ農村の開発や発展における「外部者」の関与のあり方が提案される。第一に、人びとが生産した物に多様な販路を確保し経済的な価値をもたせること（無駄を作らないこと）である。第二に、ミドルマン的な存在への注目である。仲買人は生産者を搾取する者として捉えられることもあるが、バスケット産業における仲買人の活動を営利的なものとしてのみ捉えるのでは不十分である。彼らの役割を理解することは「外部者」と現地の人びとの協働の第一歩となる。第三に、現地の人びとの一見不可解な実践を理解しようとすることである。地域研究者の役割とは、現地の人びとの営みを理解しようと努力し、得られた知見を発信することである。これは、現地の人びとと開発援助機関や企業の間で生じる誤解や不信を解く鍵となるかもしれない。

本書の魅力は大きく2つある。1つ目はデータの多様さと厚さである。本書ではさまざまな種類の質的・量的データが提示されており、産地の「気まま」なバスケット製作の雰囲気や醸成される様子が説得力をもって説明されている。2つ目は、バスケット製作の「気まま」な雰囲気と産地の活気についてである。バスケットはその巧拙が問われないた

めに編み手の参入が途絶えず、また、編み手の間で技術が共有されるために技術の底上げや継承が容易になる。世界の各地で伝統的技術の衰退が指摘されて久しい。伝統的技術を維持すること、それを生かして現地の生活の質を向上させることは、地域研究者だけでなく国際開発援助に携わる人びとにとって重要な課題である。本書はこの課題に対する有益な視座を提供してくれる。

他方、内容が興味深かったがゆえの物足りなさも感じた。本書の重要な主張である、仲買人の「僕らのやり方」（編み手の言い分を聞いたり金銭的支援をしたりする）へのこだわりが、彼らがバスケットの集荷を「ほどほどに」順調に行なうためという説明に終始していることに対する物足りなさである。仲買人が編み手と同じ村（あるいは近隣の村）の住人であるならば、バスケット製作以外でも日常的に関わり合うことはあるだろう。村における人間関係のあり方や、良好な関係を維持するための理念や実践が、仲買人の「僕らのやり方」といかに結びついているのか（あるいはいないのか）についての言及があれば、仲買人が編み手に対して非常に親身な態度をとることの理由を、より厚く描くことができただろうと思われた。この点についての筆者の考えは、機会があれば直接尋ねてみたいところである。

本書は、グローバルに流通する手工芸品の産地で何が起きているかを丹念に描き出した優れた書物である。本書が多くの人に読まれ、地場産業の維持や発展、国際開発援助に資するものになってほしいと思う。